

修士論文要旨

学籍番号 22GH102 第 号

氏名 石岡 彩華

人文社会科学 専攻 (コース: 文化芸術コース)

論文題目

一代様信仰の知識と実践—東北地方における陰陽道的知識の展開

本稿では東北地方における一代様信仰の実践を取り上げ、その実践の多様性の要因を明らかにすることを目的とする。一代様信仰は生まれ年の十二支と8体の神仏を組み合わせた一生の守り本尊の信仰である。元々は江戸時代に刊行されていた陰陽道書の系譜を引く大雑書に掲載されていた知識であったとされ、書物の流通によりその知識は全国的に拡大したが、現在では主に東北地方や沖縄県など周縁的な地域で一代様信仰として習俗化している。

この信仰に関する先行研究では、信仰の起源や信仰が広がる契機についての考察がなされてきたが、実際に展開している多様な実践については明らかにされてこなかった。そこで本稿では、文献調査、実地調査、アンケート調査、聞き書き調査から、東北地方における一代様信仰について、①どのように宗教的实践として表出しているのか、②宗教的实践による地域差はどのようなものか、③どのようなプロセスで個人の宗教的实践へと変化したのかを検討した。その上で、実践の多様性の要因を明らかにし、民俗文化における文字文化の受容とその展開を考察した。

まず第一章では先行研究を確認し、研究目的や研究方法を述べた。第二章では大雑書の概要や東北地方での受容、大雑書に書かれた一代様信仰の知識、宗教者によるその知識の利用を確認した。第三章では文献調査から東北地方における一代様信仰の実践を把握した。第四章では青森県津軽地方、岩手県盛岡市、宮城県仙台市での実地調査と聞き書き調査から、一代様信仰を取り込んだ寺社の傾向性や寺社が与える実践への影響を検討した。第五章では青森県津軽地方での聞き書き調査やアンケート調査などから、寺社やメディアにおける信仰の枠組みと個人の一代様信仰の認識や実践を比較・分析し、個人による一代様信仰の実態を明らかにした。第六章では、前章までに検討してきた内容を基に本稿の3つの目的に従ってまとめを行った。

結論として、まず①の目的については、「ある(十二支)年生まれの人の守り本尊はある神仏である」という基本的な知識に他の知識が結合したり、習俗に取り込まれたりすることで実践として顕在化していた。この結合する知識や取り込む習俗は、地域や個人ごとに異なるため実践の多様化が起きていたことが明らかとなった。②の目的については、寺社の介入がある地域では結合する知識と取り込む習俗はある程度、固定化しているため実践は一見単調であった。しかし、その中でも個人は自身の都合に合うよう柔軟に一代様信仰の再解釈や実践の変更を行っているため、同様に見える実践であっても、その詳細は個人ごとに多様となっていた。③の目的については、一代様信仰は大雑書という書物により広がった知識であり、元は読み書き能力がある人々中心の個人的な信仰であったと考えられる。それを宗教者が媒介することで、その信仰は読み書き能力がない人々にも広がり、制度化や集団化していった。宗教者の影響が弱まった現在では、個人が自身の都合に合うよう柔軟に一代様信仰を解釈し、実践を選択するようになることで、個人的な信仰へと回帰していることが判明した。

【キーワード】 一代様信仰、宗教的实践、大雑書、陰陽道的知識、文字知